

中国

漢民族と周辺諸民族

問題提起

漢民族の歴史とは何かということ自体が大問題であるが、中国の歴史が、漢民族と周辺諸民族との絡み合いによって展開されてきたことは事実である。それならば、そうした漢民族と周辺諸民族との関係について、東洋史学界ではこれまでどのような取りあげられてきただろうか。それには主として二つの側面からのアプローチが試みられてきた。一つは中国を中心として、中国と周辺諸民族との関係をみようとするもので、「冊封体制論」がそれである。もう一つは、中国以外の民族の立場に立つもので、中国に侵入し、支配した諸民族が、どのようにして漢民族を支配したかという視角からの考察で、「征服王朝論」などがこれである。

しかしながら漢民族と周辺諸民族との関係を、その接触の場において考察しようとする試みは意外と少ない。かつて白鳥庫吉氏は、中国と北方遊牧民族との関係のあり方を「南北抗争論」としてとらえ、これに対し松田寿男氏は、遊牧民側の侵略はあくまでも一時的な非常事態であるとし、「絹馬交易論」を提示した。

ところで、最近学界では地域史研究の必要性がしきりと言われている。地域史研究には、まず領域設定が何よりも必要であるが、領域設定には、その境界の設定とその境界でのあり方が問題である。

これを東アジアという空間に当てはめてみた場合、漢民族と周辺諸民族が接触する中間地帯の動向が問題となるであろう。かつてO・ラティモアが「プール」と名称した中国辺境地帯である。彼は、同地域が、複数の民族だけでなく、次の時代を左右する新しい勢力がそこから湧き出てくるとの意味をこめて「吹き溜まり」と名付け

たのであった。

そこで我々は、以上の観点をふまえ、新しい中国史を模索する基礎作業として三つの報告を用意し、シンポジウムを企画した。

北魏の部族支配と領民酋長制

勝畑 冬実

はじめに

四世紀半ばに鮮卑の拓跋部によってたてられ、中国史上初めて華北を統一した異民族政権である北魏については、従来様々な視点にたった研究がおこなわれてきた。その中でも、特に北魏史の性格を決定づけるのが部族支配の問題である。彼らは何とも遊牧民族であり、伝統的な部族組織を有していた。それが中国王朝を建設するとき、はたしてどのように対処され、変化していったのか。また、彼らは他の遊牧部族を支配する際にどのようにしたのか。これらは、北魏を中国史上どのように位置づけるのかという問いと大きく関連しているのである。

従来の研究では、彼らは初期の段階で部族組織を破壊し、漢化する

方向へむかったのだといわれている。というのは、本来部族制と、中国王朝として強力な中央集権体制を保ち、広大な華北を支配することとは矛盾するとの基本的な考え方があるからである。さて、彼らの社会形態の変化の上で、契機となる事件の最も重要なものは、初代皇帝道武帝が行った部族解散政策である。これは、これまでは、北魏が中央集権国家として発展するために、北族の部族組織を解体し、彼らを定住、農耕化させた政策として解釈されてきた。そしてこの政策こそが、北魏が他の五胡の国家と違う点であり、遊牧民族である拓跋部が部族制をのりこえて中国王朝を建設できた理由なのだ⁽¹⁾と位置づけられてきたのである。

しかしながら、部族解散を伝える三つの記事を再検討してみると、この政策が、遊牧民の定住農耕化を指すとは考えにくい⁽²⁾。それでは、一体彼らの部族組織はどのように支配を受けていったのだろうか。この点を考える上で問題となってくるのが「領民酋長」である。

北朝期の史料には、「領民酋長」なる語が散見される。従来、この領民酋長とは、部族解散政策が及ばなかった遊牧民に対して、北魏が与えた称号だと考えられてきた。しかし、部族解散を「部族組織の破壊」としてとらえられない以上、この領民酋長の問題は、改めて考え直してみなければならぬ。

一 史料に見える領民酋長の時期の問題